

ピロリ菌・除菌の考え方

— 除菌による胃癌予防は、若い人ほど有効 —

笠間市立病院 石塚恒夫

ヘリコバクター・ピロリ（以下ピロリ菌）とは、ヒトの胃に感染する細菌です。アルカリ性のアンモニアを産生することで、酸の強い胃の中でも増殖することができ、大便秘で汚染された井戸水や食物の摂取が感染の原因ですが、成人では急性胃炎を起こすだけです。免疫力の不十分な5歳以下の小児期に感染すると慢性胃炎となり、胃潰瘍・十二指腸潰瘍、さらに胃癌の原因になります。つまり、今、高齢の方は幼少期の環境衛生が、現代ほど整備されていなかったため、高齢者ほど感染率が高いのです。（50歳未満では2割以下、60歳以上では5割以上）。

ピロリ菌の除菌には、制酸剤と2種類の抗生剤を通常の倍の量を1週間服用します。平成12年に胃潰瘍・十二指腸潰瘍の再発予防として保険適用されましたが、平成25年より胃癌予防のため慢性胃炎での除菌が認められました。

大事なことは除菌を行う年齢です。慢性胃炎が進行すれば、胃粘膜が萎縮（薄くなること）した

り、腸型粘膜に置き換わったりしてしまいます。その段階では除菌で胃癌発生を減らせても、完全な予防はできません。一般に50歳未満での除菌が勧められており、それ以降で成功しても定期的検査が不可欠です。

内視鏡検査で慢性胃炎を確認することが、保険適用の条件です。痛みやもたれなどの症状のある方は、ぜひ内視鏡検査を受けてください。症状がないので内視鏡には抵抗があるという方は、まず当院でも行っている採血検査などを利用してください。抗ピロリ菌抗体や胃粘膜萎縮度を判定するペプシノゲン法で測定することで、現在の感染状態を把握することができます（ともに陰性なら、それ以上の検査は不要です）。ちなみに私（47歳）は、抗ピロリ菌抗体は陽性で、ペプシノゲン法は陰性でした（ピロリ菌に感染しているが、胃粘膜萎縮はない状態）。さっそく除菌に成功して胃もたれを感じることもなくなり、将来の胃癌発生の心配もほぼ無くなりました。

笠間の歴史探訪 15

笠間城八幡台櫓

笠間市街地の大町・愛宕町を北に進むと、左手に笠間保健センターがあり、さらに進むと右手に日蓮宗長耀山真浄寺があります。その入り口には「南無妙法蓮華経」の題目碑が建っています。

山門の奥に二十二段の石段があり、その上に、総檜材、二層入母屋造り、瓦葺きの七面堂があります。堂内には七面天女・鬼子母神・三十番神の三尊が安置され、多くの人々に信仰されています。

この堂は、もと笠間城の本丸の八幡台にあった物見櫓で、明治維新後の廃城の時に、真浄寺の檀信徒が払い下げを願い出て、明治十三年（一八八〇）に解体して境内に運び入れ、七面堂として再活用した建物です。

昭和四十四年（一九六九）に笠間城のゆかりの建造物「笠間城櫓」として、茨城県の文化財に指定されました。

同四十九年には構造はそのままにして解体修理され、現在の白壁の櫓に復元されました。櫓の規模は、一階間口八メートル、奥行き六・五メートルあります。

笠間城は山城で天守櫓、穴ヶ崎櫓と八幡台櫓の三棟があり、戦時は物見櫓として使用しました。八

幡台櫓は江戸時代は武器倉庫に使われました。

延享四年（一七四七）の記録には八幡台櫓に次の武器が格納されていた。弓二〇張、鉄砲六〇挺、長柄三〇本、鞆二〇穂、根矢二〇筋、鞆二〇指、胴乱五〇、口薬入五〇、玉箱二荷、玉大小三〇〇、大縄一〇〇筋、狸々皮鉄砲袋五〇、合塩硝七〇貫目、塩硝三〇貫目、硫黄一〇貫目、鉛三〇貫目、鑄型大小八つ、鑄鍋大小五つです。

この多量の武器は城主が転封する度に目録と照合し、厳重に引き継がれました。平時でも、武器の手入れや保管などに相当神経を使ったことでしょう。

この建物は、江戸時代には櫓として城や武器を守り、明治からはお堂として人々の心を護っています。

（市史研究員 小室 昭）



笠間城八幡台櫓（七面堂）